教団新報

定　価　1部220円（本体200円〒共283円）
予約購読料　1年分　〒共　3,962円
紙代のみ　3,080円
振替 00140－9－145275
本紙を購読ご希望の方は、前金をそえて、お近くのキリスト教書店へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所　日本基督教団
169-0051　東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内　電話03（3202）0546
FAX03（3207）3918
URL http://uccj.org
発行人　網中彰子
編集主筆　嶋田恵悟
印刷所　株式会社きかんし

春の新メッセージ

神は共におられる

マタイによる福音書1章18～25節

雲然 俊美

クリスマスの恵みの内に

教会の暦では、クリスマスの恵みの内に新しい年の歩みを始めております。クリスマスにおいては、コロナ禍を経て、ようやく主にある交わりを再開することができた喜びを覚えた教会もあれば、災害に見舞われ、なお困難の中を歩んでいる教会もあることと思います。

クリスマスを迎えたからと言って、あるいは、新しい年を迎えたからと言って、それぞれの困難な状況が一気に好転するということはありません。困難な状況はそのままであり、苦しみと悩みは続いています。

けれども、私たちがクリスマスの恵みのメッセージとして聴くことは、私たちを罪から救う方がお生まれになったことであり、神さまが、苦しみや悩みの中にある私たちと共におられるということです。クリスマスの恵みの内に歩むとは、今も、これからも変わることのないインマヌエル（神は我々と共におられる）のお方と共に歩むということです。

秋田桜教会（奥羽教区）

ヨセフの苦しみと悩み

主イエス・キリストがインマヌエルのお方であられることは、主イエスの父となるヨセフが、深い苦しみと悩みのただ中にある時に証しされました。

ヨセフは、婚約者のマリアから、「聖霊によって身ごもっている」（18節）ことを知らされ、苦しみ悩みました。信仰あつく、マリアへの愛情も深かったヨセフであったからこそ、その苦しみと悩みは深かったのです。

ヨセフは、マリアの言葉に嘘は無いことは分かっていたことと思います。けれども、頭では分かっていても、繰り返し心の内に浮かびあがってくる、「いったい何が起こったのか?」、「どうして自分の人生にこのようなことが起きたのか?」との思いを振り払うことができなかったのではないでしょうか。

そこでヨセフは、「マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心」（19節）しました。当時、婚約は結婚と同様の重い意味をもっておりました。婚約期間中に妊娠ということが明らかになるということは大問題です。ましてや、婚約者であるヨセフが、その妊娠についてはあずかり知らぬことであるとのことが明らかになれば、マリアにはきびしい裁きが科せられることになります。

ヨセフは、信仰者としてマリアを妻に迎えることはできないという思いと、このことが表ざたとなってマリアを苦しめるわけにはいかないとの思いから、自分が人々からの非難を受けることを覚悟し、ひそかに縁を切ろうと決心したのです。ヨセフの信仰とマリアへの愛による決心でした。

「恐れず迎え入れなさい」

そのような決心をしたヨセフに、主なる神さまのみ言葉が告げられました。「ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい」（20節）と。

マリアを迎え入れるということは、ヨセフにおいては、今、起こっている出来事をそのまま受け入れるということです。ヨセフは、その現実を受け入れることを恐れていたのです。

神さまは、ヨセフに、マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのであり、人々を罪から救う者となることを告げました。そして、ここでマタイによる福音書は、このことは預言者によって言われていた、インマヌエルのお方の誕生を意味していることを記しています。

ヨセフの決心は覆されました。ヨセフは眠りから覚めると、マリアとそのお腹の中の主イエスを受け入れました。この後、ヨセフはマリアの出産を守り、幼子の身に危険が迫っていることを知ると、遠くエジプトまで逃れ、さらに、家族が安心して暮らすことができる地へと移動しました。このヨセフの行動によって主のご降誕のみわざが実現しました。ヨセフは寡黙な信仰の勇者でありました。

現実に向き合う力

教会に仕える中で、人間関係で悩んでいる、いわゆる「生きづらさ」を抱えている方たちとの出会いが続いています。皆さんそれぞれ自立した生活を目指し、努力をしています。そのような方たちに対しては、早く解決の道を見つけ出すとか、正解を探し求めるようなことはせず、ただその方に向き合い続け、その方自身が、生きづらさを抱えている自分自身と向き合うための時間を共に過ごします。

そのような中で知らされることは、人間には本来、自己回復力（レジリエンス）というものが備わっているということです。そして、悩みや課題、あるいは、自分の欠点や弱さを抱えたままで、「これが私」、「これが私の人生」と受け入れる力（ネガティブ・ケイパビリティ）を身につけて行くということです。

ヨセフは、主イエスのお誕生が神さまの救いのみこころによる、神さまのみわざであることを信じ、眠りから覚めてマリアを受け入れました。それは、ヨセフの苦しみと悩みが無くなったということではありませんでした。ヨセフは、幼子イエスの成長を目の当たりにする中で、苦しみ悩みつつ、「父ヨセフ」（マタイ13・55～56、ルカ4・22）として家族を守り、共に歩んだのです。

神と共に歩む人生

アドヴェントの前後に、40年以上交わりをもち続け、信仰を導いていただいた方々との別れを経験しました。その中のお一人は、終戦直後、10代半ばで樺太から秋田に移り住み、当時、教会を拠点に行われていた「ララ物資」の配給の手伝いをしたことから教会に連なり、以後、その教会に仕え続けられました。ご家庭においても、教会においても、何度も試練に直面しましたが、皆さんに慕われつつ、信仰の生涯を全うされました。

その方は、若き日に神さまと出会った喜びを持ち続け、証しをして、信仰の生涯を全うされました。まさに、神さまと共に歩んだ人生でした。

主イエス・キリストは、苦しみ悩む私たちの歩みのただ中にお生まれになりました。そして、十字架の死によって「自分の民を罪から救う」（22節）救い主のみわざを成し遂げられました。

私たち罪人を、罪から救い出されるまことの救い主のみ名をほめたたえて、新たな一年の歩みを進めてまいりましょう。

（秋田桜・下浜教会牧師）

お知らせ

教団事務局・出版局・年金局は12月29日から1月4日まで休業いたします。
総幹事　網中彰子

第17回台湾基督長老教会と日本基督教団との教会協議会

キリストを共に愛し、台日心ひとつに

11月25日から27日に、第17回台湾基督長老教会と日本基督教団（以下教団）との教会協議会が行われた。コロナでの延期を経て、7年ぶりの開催となった。更に、2025年は、台湾基督長老教会との宣教協約改訂40年の記念の年にあたり、今回の教会協議会は大切な意味を持つ会議となった。

教団は、1963年に台湾基督長老教会と宣教協約を結ぶに至ったが、実質的な協力関係を形成していくことにはなかなか繋がらなかった。その後、教団内で教団の戦争責任の課題を担い、アジア諸教会との新たな協力関係を模索する動きがあった。また、台湾基督長老教会は、1970年にWCCからの脱退を表明し、教団はそれを支持した。この時期、台湾基督長老教会は、「国是声明」や「人権宣言」等を公にし、台湾に住む人々と台湾の将来に強い関心を寄せ、責任を明らかにした。そのような中で、宣教協約改訂の動きが起こり、1985年4月11日宣教協約の改訂がなされた。改訂された宣教協約前文に「この間、社会的状況や教会内の様々な事情の故に、多くの苦しみを経たにもかかわらず、両教会は『キリストのからだ』にふさわしい痛みと一致を持って協力関係を築き上げるには至らなかった」との言葉があり、その反省の下で、改めて協約を締結することを確認している。

宣教協約改訂後、両教会は、協約の実質化に取り組むことになった。相互の総会に代表者を送ると共に、教会協議会を開催することとなった。教会協議会は、1985年に第1回が行われ、その後隔年で開催されてきた。お互いの宣教の課題を共有することを通して、宣教協力の在り方について協議を深める機会となっている。

今回の教会協議会は、彰化県の彰化基督教病院国際研修センターで、「キリストを共に愛し、台日心ひとつに」を主題として開催された。

11月25日は、潘恩盛台湾基督長老教会総会議長の説教により開会礼拝が行われた。その後、2日間で6つのセッションが行われた。第1セッションは、台湾のシンクタンク「遼景基金会」の賴怡忠執行長を講師とし、台湾が置かれている現状、特に地政学的緊張状態や、台湾国内における誤情報やフェイクニュースによって民主主義体制への信頼が揺らいでいる状況について、説明がなされた。台湾の直面する厳しい状況を受け止めると共に、偏った情報による社会不安は、日本にも共通の課題であることも受け止めさせられた。

第2セッションでは、お互いが派遣する宣教師の報告を聞いた。教団が派遣し現在国際日語教会で奉仕するうすきみどり宣教師と、台湾基督長老教会から教団北海教区に派遣されているディヴァン・スクルマン宣教師である。遣わされた地で重要な働きがなされていることが報告され、宣教師の交流が継続することを願うとの意見が出された。

第3セッションでは、青年宣教について、特に、隔年で行われている教団と台湾基督長老教会の青年交流事業である「台湾ユースミッション」の双方からの参加者から報告があった。この交流が青年の育成に大きな役割を果たし、それぞれの青年がお互いを覚え歩んでいる姿に、教会の未来の姿を見せられる思いがしたとの意見があった。

一日目の夜は、歓迎の夕食会が行われ、その場で、主に原住民の方々が民族衣装を着て、歌を歌われた。原住民の文化の豊かさを覚える時となった。

11月26日は、朝の祈りの後、まず、原住民宣教を主題に、第4セッションが行われた。台湾の原住民の牧師から、台湾基督長老教会の原住民宣教の取り組みについて報告がなされた。日本側からは、北海教区のアイヌ民族情報センターの働きを中心とするアイヌ民族の方々との関わりについて、報告がなされ、協議が行われた。

続く第5セッションとして学校・神学校について協議を行った。台湾基督長老教会は、現在6つの学校（神学校を含む）を運営しているが、少子化の中で、新体制で取り組んでいる姿が報告された。また、教団側からはキリスト教学校で奉仕する牧師から、厳しい現状の中での恵みの報告があった。

最後のセッションでは、IT企業の熊本進出をきっかけとして、台湾基督長老教会が熊本宣教を課題として考えていることについて報告があり、情報を共有する時となった。

二日目の午後、参加者は彰化基督教病院の活動を見学し、台湾中部の中核病院として重要な働きをしている病院の姿を深く知る機会となった。

11月27日は、朝の祈りの後、共同声明文の作成を行った。この協議では様々な意見が出され、1時間の予定が2時間余り協議となり、ようやく声明文が纏った。協議が長引いたので、閉会礼拝は行うことが出来ず、讃美歌と雲然俊美教団議長の閉会祈祷により、会を終えた。

今回の教会協議会で、それぞれの教会が置かれている現状について情報を共有し、厳しい状況の中でも今後の展開についても協議することができた。このような機会を通して、宣教協約の内実を深めていくことが求められていることを強く思わされる時となった。

（黒田若雄報）

上、集合写真
左、一日目第3セッション

第17回日本基督教団と台湾基督長老教会との教会協議会 共同声明

日本基督教団と台湾基督長老教会とは、2025年11月25日から27日まで、彰化基督教病院国際訓練センター（台湾・彰化県）において第17回教会協議会を開催した。本年は宣教協約改訂後40年の記念すべき時にあたり、本協議会では、「キリストを共に愛し、台日心ひとつに」をテーマとし、両教会が直面している宣教課題を分かち合った。

以下、本協議会において両教会が共有した内容を共同声明として発表する。

1. 今回の教会協議会において、両教会の参加者は、東アジアにおいて高まる地政学的緊張状態、さらに誤情報やフェイクニュースによって、民主主義体制への信頼が失われつつあるなど、日台両国が現在置かれている状況および情勢について理解した。
2. 両教会の宣教師の宣教報告を通して、それぞれの奉仕を共有した。台湾に駐在するうすきみどり宣教師からは、国際日語教会での日台の歴史に基づく奉仕経験を分かち合った。また、日本・北海道に駐在するディヴァン・スクルマン宣教師は、北海道での奉仕経験を通して、日台両教会および両国の間に素晴らしい架け橋を築いた。両教会は、互いに派遣された宣教師がよき宣教のパートナーとして働いていることを深く認識した。これらの宣教活動が今後も続くことを願っている。
3. 青年の報告においては、森湖都葉氏と楊宣恩氏を通し、青年伝道が両教会にとって重要な使命と役割を担っていることが示された。台湾教会が毎年開催する「I Love Taiwan Mission」および隔年で行われる「台湾ユースミッション」は、日台教会の活発な交流を生み、青年伝道をより具体的で実践的なものとしている。この働きを通して、両教会の青年は、宣教の現場を歩み、長期的な友情を築いている。
4. 台湾における原住民教会が台湾基督長老教会の中で重要な役割を果たしている。日本の教会も北海教区におけるアイヌ民族との交わりと宣教を受け止め、そのために両教会は宣教師の派遣を継続し、宣教の協力を推進する。
5. 日台の社会が少子高齢化等の問題を抱えている現状と私たちの学校を再構築し、教育の場における宣教を通して、青年の育成と信仰を養うことに取り組むことを共有し、両教会は学校と神学校との交流を深める。
6. AI時代に入り、台湾は半導体製造において世界を担う立場になり、日本は政治経済と文化の大国である。その時期にあって、台湾基督長老教会はIT企業の進出を宣教の機会ととらえている。本協議会の参加者は、熊本伝道の可能性についての情報を共有した。また両教会は中会及び教区との交流を深める。

2025年11月27日

第17回日本基督教団と台湾基督長老教会との教会協議会

能登半島地震報告《ボランティアから》

途切れることのない学生のボランティア

関西学院高等部

「バトンをつなぐ」

関西学院高等部は、昨年・今年と能登の被災地を訪問した。

1年目は北陸学院大学のプログラムで輪島へ行った。

私たちは、瓦礫の撤去や全壊・半壊した家の掃除に行ったつもりだった。しかし与えられた仕事は「能登キリコ祭り」の準備と仮設住宅での傾聴ボランティアだった。正直な思いは拍子抜け。もっとしんどいことをしにきたのに、高校生だから、女子生徒たちだから、しんどい仕事が回ってこない。無力さを感じるばかりだった。しかし同時に感じたことは、高校生だから若いからできることがあるということだ。仮設住宅で出会ったおばあさんは「若い人の姿は最強」、「若い人を見るとね、捨てられてないって思えるんだ。関西から来てくれてありがとう」と言ってくださった。被災地の方々は、大人には不満をぶつけることが多いそうだが、高校生には優しい。実際、役所でも若い人が窓口対応するとクレームがあまり出ないそうだ。

2年目は、日本基督教団被災地派遣ボランティアのプログラムで珠洲へ行った。

今回は、仮設住宅での傾聴ボランティアのために行ったつもりだった。しかし与えられた仕事は、溝堀りだった。震災後に追い打ちをかけるように起こった水害によって排水溝が埋まり、雨が降る度に庭が水浸しになるそうだ。女子生徒たちは「一箇所の作業でこれだけしか進まないなら、復興に何日、何年必要なのだろう。悲しくなる」とこぼしながら、ひたすら溝を掘った。半日で10mも掘れなかった。翌日から他のボランティアが引き継いでくれた。開通した写真を見た時に、「バトンをつなぐ」という言葉が浮かんだ。

「ボランティアは、相手がしてほしいことをすること。ボランティアがストーリーを決めてはいけない」、こんな当たり前のことに今さらながら気づかされた。昨年の生徒と今年の生徒はメンバーが違う。来年行く予定の生徒とも違う。高等部の中でも、確かにバトンがつながっている。

（松隈　協報／関西学院高等部宗教主事）

北陸学院大学

学生が紡ぐ「たゆまぬ支援」

2024年1月1日に発生した能登半島地震後の復旧支援は、半島という地形的制約やボランティア活動自粛要請等の影響で大きく停滞しました。さらに2024年9月21日・22日に奥能登地域で豪雨災害が発生し、復旧・復興を大幅に後退させるだけでなく被災者に多大なダメージをもたらしました。

北陸学院大学では地震発生直後に「北陸学院大学被災地支援センター」を立ち上げました。同センターは支援物資保管拠点および県外大学生らの一時休息あるいは宿泊施設として経済的負担の軽減や被災地への移動の支援の役目を果たしました。さらに被災地のニーズと活動大学等のボランティアのマッチングを担い、ボランティア活動のハブとしてキリスト教主義学校を始め、日本ソーシャルワーク教育学校連盟、DWAS－JAPAN、その他の組織と連携して連続的・継続的支援を続けています。

ただ、同センターは金沢市にあり、被災地までの移動に2時間以上かかり、活動時間の制限（短縮）とボランティアの疲労増大につながっていました。

そこで、日本基督教団の羽咋教会富来伝道所と内灘教会を宿泊拠点として提供していただき、ボランティアの負担軽減につなげることができました。

本学のボランティア活動は被災地の片付けなどの物理的支援ももちろん大切なことと考えますが、それに増して作業の手を止めてでも被災者の話に耳をかたむけ、その痛みを共有し、寄り添うことも大切な支援と考えています。その時々の現場ニーズに即応しつつ途切れることのない学生のボランティア活動は、被災された皆さんの前に進む力になるとともに、参加学生自身の成長も促しました。

「また学生さんが来てくれたんやね」と笑顔で迎えてくださる被災された皆さんの言葉が、一人の学生が来る回数は限られていても、糸を紡ぐように次々と学生が来ることの力の強さを象徴していると感じます。

（富岡和久報／若草教会員、25年8月まで北陸学院大学社会学部教授・ヘッセル記念図書館館長として勤務）

輪島市門前町深見での落下した屋根瓦の片付けと住民の方との記念撮影

明治学院東村山高校

微力だけど無力じゃない

明治学院東村山高校では、東日本大震災の復興支援のために生徒と教職員が有志のボランティア・チームを2011年春に結成した。東北教区被災者支援センター・エマオが窓口となり、2011年5月の第1陣から現在まで計39回、のべ284名の生徒が石巻市や仙台市笹屋敷地区などで泥だしや被災家財の整理、避難所や仮設住宅での炊き出し、津波被災地域の子ども会のお手伝いなどをおこなってきた。現在は東北教区被災支援小委員会を窓口として、毎年8月上旬に開かれる笹屋敷夏祭りのお手伝いと仙台平和七夕のお手伝いをさせていただいている。また、2015年には茨城県常総市の水害被災地域で、2019年には埼玉県川越市の台風被災地域でも活動し、2024年からは能登半島地震の被災地でも活動している。

能登での活動は能登ヘルプ（能登地震キリスト災害支援会）を窓口として2024年の夏から始まった。第1陣は輪島市の農家で被災家財の整理作業を、第2陣は珠洲市の津波被災地域で側溝の泥だしをした。冬の第3陣では志賀町の仮設住宅でクリスマス会を開いた。翌年春の第4陣では輪島市の仮設住宅でチョコフォンデュをおこない、夏の第5陣では手作りクレープの提供をおこなった。回を重ねるごとに現地の方々との交流が深まり、生徒たちの人間的な成長も実感している。

東京に帰ってからも生徒たちは「伝える努力」を続けている。全校礼拝で活動報告をおこない、近隣の東村山教会でもボランティア報告会を開いた。能登豪雨の時には700枚以上の雑巾を集めて現地に送った。文化祭では展示と募金活動、被災企業の物品販売もおこなった。

「ボランティアは微力だけど無力じゃない！」をスローガンに、これからも微力ながら隣人愛の実践を続けて行きたい。

＊詳しい活動内容や参加生徒の感想文はボランティア・チームのブログをご覧いただきたい。http://mghv.jugem.jp/

（佐藤飛文報／明治学院東村山高校社会科教諭、東村山教会員）

被災家財の整理作業

仮設住宅でのチョコフォンデュ

伝道報告

伝道のともしび

TOMOSHIBI

七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。…イエスは言われた。「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」
ルカによる福音書第10章17節～20節

伝道推進室より応援した教会・伝道所

ルーツを活かした協力関係の中で

富田林教会・初芝教会牧師（兼務）　**兼子　洋介**

初芝教会の歴史は、大阪長野教会（現在の河内長野教会）の出張伝道から始まりました。「20年史」によると、1948年5月に地域の東初芝会館を借りて子ども会を行ったのが最初の活動でした。「ああ無情」のスライド上映や、紙芝居などを行うと、地域へのチラシ配りをして告知、子ども向けの活動を中心に、伝道開始。1954年には、初芝伝道所設立まで、進展しました。さらに河内長野教会、登美丘教会、また、初芝と同じように、聖書学校の分校のような形で、戦後の伝道が再開されていた富田林教会との、生い立ち上のつながりもあり、この年「河南ミッション委員会」が立ち上げられ、その支援もあって、1956年9月には、教会用地取得、1960年10月会堂建築、献堂式と進み、東初芝会館を会場に行っていた活動を、すべて伝道所の会堂において行うことが可能に。建築の借り入れが残る中、第二室戸台風によって、新築の会堂の屋根が吹き飛ばされ、大阪教区の援助、河南ミッション諸教会の献金によって何とか復旧するなどの困難、試練の時期も過ごしましたが、1964年7月に第二種教会として設立、初芝教会となりました。1969年には、河南ミッションからの貸付もあり、さらなる増築が成り、現在の初芝教会の土地建物の姿がおおよそ出来上がりました（その後改修は行っています）。

教会堂の前で

その後、時は流れ、筆者（2008年12月より富田林教会牧師）が初芝教会との関わりを持つことになったのが、着任してから1年ほど経った頃でした。河南ミッションは存続していましたが、組織の性格上、地域長老会（プレスビテリ）ほど踏み込んだ性格のものではなく、委員会を名乗るレベルでの活動であったこともあり、各教会の牧師交替なども経て、活動は年に一度の委員会と、研修会程度という状況になりました。振起日大会なども行われなくなり、初芝教会の近況について、深く知ることが乏しくなりました。そのような中、河内長野教会・富田林教会・登美丘教会の長老研修会に、当時初芝教会代務者馬路ひろみ牧師が出席され、会員の減少、前任者の病による休職とその後の混乱という内情を打ち明けられました。そこで一同驚愕したことから、現在への流れが生じることに。兄弟教会の苦境を知ることに鈍かったことを悔い改め、午後礼拝とし、河南ミッションの牧師たちが交替で講壇を担い、礼拝生活から支えることが始まりました。やがて、登美丘教会との兼牧という形となり、午前は登美丘、午後は初芝で礼拝という基本形が定着して、今日に至っています。

2025年度を無牧師で迎えた両教会は、長老教会の伝統を生かすべく、登美丘教会が連合長老会に加盟をしていたため、同じく連合長老会に加盟していた富田林教会牧師を代務者とする形で、歩んでいます。奇しくも、同じルーツを持つ教会同士が、ルーツを活かした協力関係の中、新たなる牧師を迎えての地域伝道に備える時を、与えられています。会員数は10名を切る状況が続いていますが、転入者、来会者も与えられており、「カナン」の地での伝道の網の一翼を担っています。

事務局報

川﨑正明（無任所教師）

25年9月3日逝去、88歳。兵庫県生まれ。61年関西学院大学大学院修了、同年より芦屋山手、姫路五軒邸教会を牧会し、関西学院中学部に02年まで務める。遺族は妻・川﨑和子さん。

森澤一由（隠退教師）

25年11月14日逝去、90歳。東京都生まれ。67年関西学院大学大学院修了、同年より福井神明教会を牧会し、サンフランシスコ合同長老教会を経て、佐世保、広島流川教会を牧会し、08年隠退。遺族は妻・森澤桂子さん。

カルト問題相談会

◎日時
2026年1月30日（金）
午後1時～3時
◎会場
日本キリスト教会館
（3階33号室）

「兵庫県南部大地震記念の日」追悼礼拝

『わたしはある』ということ～生きることの座標軸～
望月修治さん（日本基督教団隠退教師）
◎日時・場所
2026年1月17日（土）午後4時
日本基督教団神戸栄光教会
◎主催・問合せ
日本基督教団兵庫教区
（℡078-856-4127）

礼拝のライブ配信は、兵庫教区事務所のホームページからお入りください。

「能登半島地震2年を覚えて」記念礼拝

中部教区では「能登半島地震2年を覚えて」、記念礼拝を行います。
《Zoom&YouTubeによるライブ配信》
＊Zoom＝中部教区内のみ
＊YouTube＝全国配信
◎日時　2026年1月1日16:00～17:00
◎司式　加藤幹夫（中部教区総会議長）
◎説教　新藤　豪（輪島教会牧師）
中部教区総会議長　加藤幹夫

https://youtube.com/live/Z6nf8JYGV8s?feature=share

ひとときの人

デイビット・マッキントッシュさん

主が何を求めておられるか

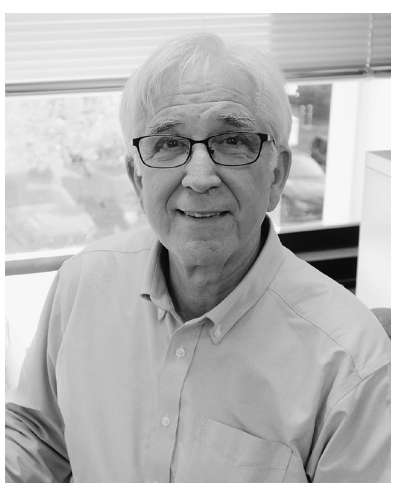
カナダで、神学生の父と国語教師の母の間に生まれた。1歳の頃に、父がカナダ長老教会から在日大韓基督教会宣教師として派遣されたことで来日、幼少期を大阪で過ごした。

高校、大学時代はカナダで学び、卒業と共に、翻訳、通訳の仕事をする傍ら、日系カナダ人に向けたテレビ番組のアナウンサーも経験。カナダで経営学修士課程に進んだ後、在大阪カナダ総領事館で働いた。

その後、日本人の牧師と結婚、しばらく日本で過ごした後、妻の留学に伴いカナダへ、この時期に日系カナダ人の「9条の会」に立ち上げから働きに加わった。

東日本大震災を機に来日、NCCのエキュメニカル震災対策室、アジア学院、教団東日本大震災救援対策本部で働いた後、複数の教派が協力して立ち上げたマイノリティー宣教センターに勤務。教会と繋がりながら、差別された人々の声を届けるアドボカシーを担った。また、若い人々に目を向けてもらうためのユースプログラムを開催、被差別部落、在日コリアン、ハンセン病、原発事故後に福島に残った人々のこと等を取り上げて来た。3年前から、教団の世界宣教の働きを担い始め、今年からはメインの働きとなっている。

カナダと日本を行き来しながら、自分から選んでというよりは、求められて様々なことを担うことが多かった。これまで出会って尊敬した人々を思い起こすと、父から受け継いだ愛誦聖句、「主が何をお前に求めておられるかはお前に告げられている。／正義を行い、慈しみを愛し／へりくだって神と共に歩むこと、これである」（ミカ書6章8節）を映し出すような人々であったと振り返るマッキントッシュさん、「私もそのようになりたい」と語る。



カナダ長老教会に所属、久我山教会出席

ノー骨式

現役で召された長老の納骨式を行った。忘れられないのは、5年ほど前のお母様の納骨式だ。高尾の霊園にご遺族が皆集まった。私は皆が揃ったことを確認して、「お揃いのようですので、始めましょう」。石屋さんが「では、お骨を…」と言うと、皆が顔を見合わせた。その瞬間、「あっ、忘れた！」。「えーっ！」。当然、「おいおい、どうすんだよ！」となる。「ごめん！絶対に忘れちゃいけないんで、玄関の真ん中に置いたんだよ！」。で、忘れた。

ここは高尾、お骨は茅ヶ崎。仕方がない。「皆で一緒にみ言葉に聞いて祈ることが大事ですので、納骨式を行います。ご遺骨は時間差で後日納めていただきましょう」と私。ご遺族も「そうだ、それがいい。骨がなくても大丈夫」。「お骨のない『ノー骨式』です」で、一同爆笑。

そんな思い出を語り合いながら、長老である息子さんの納骨式後の食事会も、とても楽しいひとときとなった。ご遺族は大勢集まったが、皆そういう方々なのだ。

「塵は元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る」（コヘレト12・7）。キリストと一つとされている私たちは、体は地にあっても、霊はキリストと共に復活させられて、今すでにキリストと共に天に座しているのだ。それぞれに残されている地上の道を、恵みを味わいながら歩みたいと願う。

（教団総会副議長　藤盛勇紀）